

1. 研究目的

東日本大震災の影響により、今まで住んでいた場所を失い、やむを得ず仮設住宅で生活を送っている人が今もいる。ほとんどの場合において、住居者同士は知り合いではないため、元来住んでいた場所、地域ではあったはずの繋がりが薄まっている。このような状況下で起きてしまう孤独死が今、問題となっている。私は、生まれ故郷を宮城県に持ち、親類や友人も複数住んでいる馴染み深いこの地の現状をどうにか改善したいと考え、本研究に取り組んだ。

2. 調査と分析

2014年11月初旬に、宮城県石巻市にある集合仮設住宅を訪れた。元々は駐車場であった場所に、14世帯の避難者の生活が営まれていた。そういった閉鎖的な環境と、見ず知らずの関係である住居者間のぎこちない距離感が住居者の孤独感を増幅させてしまっている。また、現地では地域住民と本を結びつけることで町全体の復興を進めている本屋さんがあり、仮設住宅住居者同士が本を通じて場を賑わせていた。そこには、仮設住宅に住む人達の交流を深めるのに必要な要素が3つ機能していた。

- (1) 交流の場・しぐみの必要性
- (2) 世代・価値観の違いに対する配慮
- (3) 住居者が交流を深めるために必要な全員共通のツール

3. コンセプトの立案

「仮設住宅全体を1つの図書館にする」

- (1) すべての世帯が参加できるしぐみづくり
- (2) 管理のしやすい本棚の大きさ
- (3) 交流を促す本棚の活用

4. デザイン展開

- (1) 貸す、借りるという行為を通して、住居者間に交流のサイクルを生み出すことをねらいとする。本を媒体に、住居者を結びつけることで、住居者の抱く孤独感を緩和する。
- (2) 世帯ごとに本棚を玄関横に設置。持ち運びのしやすさを配慮して大きさを決めた。(図2) 移動時に本が落ちないことや、お勧めの本は表紙を見せて紹介ができるよう工夫をした。(図3) また、様々な本のサイズにも対応できるよう

に縦×横の比率を1:2にすることで、美しく、かつバリエーションに富んだ積み重ね方が可能である。(図3)

- (3) 住居者が交流を図れるような定期的な集会を、持ち運び可能な本棚を用いて開く。住居者1人1人がお勧めの本を入れて持ってきたそれぞれの本棚を積み重ねることによって、住居者全員の好みが変わる、色のついた仮設住宅全体で1つの本棚が完成する。

5. 完成図

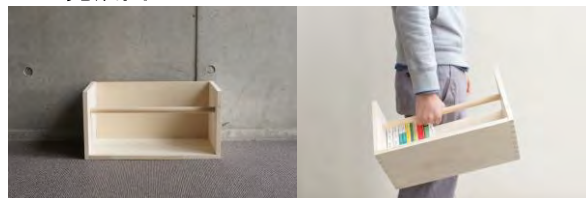


図1 本棚(単体)

図2 持ち運び時

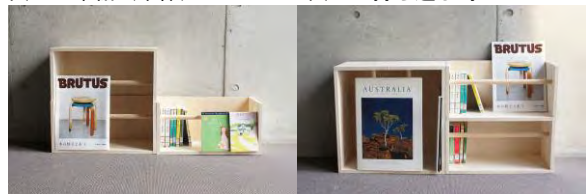


図3 組立のバリエーション

6. 結論

制作した本棚を被災地である石巻の仮設住宅に持っていき、住居者から意見をいただくことを検討している。毎日、仮設住宅全体で、各世帯の本棚を玄関横に置きなおすことで、本棚の状況が昨日と変化のない世帯の住居者の安否を確認でき、それが孤独死を未然に防ぐことに繋がる。

文献

- [1] 鈴木拓也 河北新報 online news「仮設住宅での孤独死3県112人、宮城が最多51人」
www.kahoku.co.jp/tohokunews/201406/20140627_73020.html
- [2] 河北新報 online news「東日本大震災 仮設住宅の窮状/揺らぐ生活基盤の対策急務」
www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/193625.html
- [3] 時論公論「遅れる住まいの復興 長引く仮設生活住宅」二宮徹
www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/193625.html